文学の杜

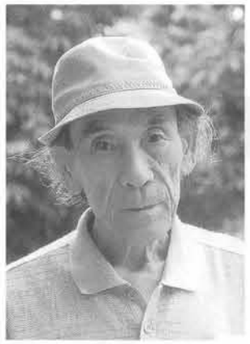
仙台文学館友の会会報

第50号
平成28年3月20日発行

仙台文学館友の会（仙台文学館内）
〒981-0902
仙台市青葉区北根2丁目7の1
電話　022（271）3020
仙台文学館のホームページ
http://www.sendai-lit.jp/

4月23日から「まど・みちお」の特別展

28年度展示　9月に「猫と文学」


まど・みちお

今年の春は、特別展「まど・みちおのうちゅう」で始まります。2014年、104才で亡くなった、童謡詩人のまど・みちおは、「ぞうさん」「やぎさん　ゆうびん」「一ねんせいに　なったら」など、誰もが耳にしたことのある童謡や、透きとおった美しさと生命力のある詩を数多く生み出しました。本展では、まど・みちおの童謡詩人としての生涯をたどるとともに、戦中の日記や、自身の詩・童謡論を書き綴ったノートなどの直筆資料を紹介します。加えて、雑誌社を退職して間もない頃にのめり込むようにして描いた絵画作品も展示し、童謡・詩・絵それぞれの表現から、作品世界を味わえる構成になっています。

毎年好評の夏休み企画「こども文学館えほんのひろば」は、絵本作家・西巻茅子さんの世界をご紹介します。代表作「わたしのワンピース」は1969年に出版された絵本ですが、今も多くの親子に愛されています。展示では、子どもの感覚を大切にする西巻さんの絵本原画をご覧いただきます。会期中は、お話会や「文学館まつり」を開催。子どもたちの声が賑やかな文学館をどうぞお楽しみ下さい。

『わたしのワンピース』

秋は「猫と文学」をテーマにした特別展を開催します。古来より猫は、人間と深い関わりを持ち、物語に描かれてきました。明治時代以降も多くの作家がインスピレーションを受け作品に著しています。今回の展示では、夏目漱石などをはじめとする明治から近・現代までの作家たちによる、猫を描いたエッセイや小説、童話などを紹介しながら、猫と作家（人間）の深くて味わいのある関わりを見つめます。また動物写真家の岩合光昭さんが宮城県石巻市の田代島で撮影した、猫たちのミニ写真展も併せて開催します。冬は、6回目となる「井上ひさし資料特集展」や「100万人の年賀状展」も開催します。

そして8月6日(土)には、日立システムズホール仙台で、こまつ座の「紙屋町さくらホテル仙台」を公演します。原爆投下3か月前の広島が舞台で、原子爆弾投下により消滅した移動演劇隊「桜隊」の史実を踏まえた作品です。原作者・井上ひさしの、演劇への限りない愛と平和への願いが込められた本作品をどうぞご覧下さい。この他にも例年通り小池光の短歌講座はじめ、短歌・俳句・川柳合同吟行会「ことばの祭典」、「仙台朗読祭」などを開催します。「仙台文学館ゼミナール2016」も充実した内容で、早い講座は5月から開講します。

今年も仙台文学館をよろしくお願いいたします。

（学芸員　渡部直子）

仙台文学館平成28年度展示予定

◆特別展「まど・みちおのうちゅう」
4月23日(土)～6月26日(日)
◆夏休み企画「こども文学館えほんのひろば」　7月15日(金)～8月28日(日)
◆特別展「猫と文学（仮）」
9月10日(土)～11月6日(日)
◆企画展「井上ひさし資料特集展vol.6」
12月3日(土)～平成29年4月9日(日)
◆新春ロビー展「100万人の年賀状展」
平成29年1月11日(水)～2月12日(日)
＊タイトル、会期は予定です

文友一滴

一月の、朝日新聞「みちのく俳壇」で〈古地図の川は暗渠に雪蛍　柿坂伸子〉という句が目にとまった。仙台城下を流れていた四ツ谷用水を詠んだ句である。雪蛍（綿虫）が飛ぶ季節になったけれども、川は暗渠の下で見えない。人間が自分の都合で、せせらぎを暗渠にしてしまった悲しみを感じた。同時に400年前の流れは変わらず存在しているのだ、という想いに駆られた。

四ツ谷用水は仙台城下の5万人の生活を支えるために、西から東に網の目のように通された用水掘である。延べ44キロに及んだという。仙台城下は美しい水の都だったのである。現在は本流のみが暗渠の下を流れ、工業用水として使われている。

さらに仙台城下にはもう一つの重要なる用水があった。塩竈方面から城下に米や塩を運ぶための舟引堀（現貞山掘）である。その中継点が蒲生御蔵であった。そこで荷は積み換えられ、水運の最終地・苦竹御蔵に向かったのである。震災前は蒲生の舟溜り跡地に立つと、船が往来し、荷上作業をする人々を想像することができた。

しかし五年前の津波で蒲生の集落は跡形もなく、遥か彼方に中野小学校が見えるのみである。もうそこには往時の賑わいの片鱗すら見ることができない。津波はその地の風土をも押し流してしまったのである。

古来、水の実用的な恩恵には計り知れないものがある。さらに水辺は人を和ませ、水の流れは詩情を醸し出す。

しかし人間はときに川を曲げたり、用水に蓋をしたりする。これも合理的な社会を築くために必要なことであるが、広く長い目で判断することが大事になって来ている、と思うのだ。（宇）

井上ひさし資料特集展

井上ひさし資料特集展vol.5「井上ひさしの江戸」が4月10日まで開催されている。「現代の戯作者」と言われた井上ひさし、全作品の3割程度が江戸を舞台に描かれている。黄表紙からどんな影響を受けたのかしらとか、なぜ江戸を選んだのだろうとか、そういうことは研究者に任せて、私達は小説を、舞台を楽しめばいい、感じればいい。深く感じた言葉は胸に残る。でも、悲しいことに時とともに薄れてもいく。展示物は私達を刺激して感動を蘇らせてくれる。新しい興味を与えてくれる。直筆原稿から井上ひさしの声や笑顔を思い出し、年表の書き込みから講座や講演を思い出す。ここで初めて井上ひさしに出会った人は、作品を創る膨大なエネルギーに圧倒されるかもしれない。資料展示を見終わって、本屋へ、図書館へ、自宅の本棚へ直行した人がいるに違いない。

井上ひさしは「劇場は夢を見るなつかしい揺りかご……その夢の真実を考えるところ」そう劇中で歌わせ、「熟練がいるのは生きることについてだけじゃ」「あとにつづくものを、信じて走れ」という台詞を残した。4月9日は「吉里吉里忌」だ。川西町フレンドリープラザで「吉里吉里忌2016」が4月9、10日に開催される。

（長沼）

私と郷土と文学 ⑧

岩木山が教えてくれたこと

東京オリンピックが開催された昭和39年1月、津軽地方で一大事件が起きた。それは延べ2千人以上の捜索隊を投入し、8日を費やした捜索も虚しく、4名が冬の岩木山で犠牲になった遭難事故だった。犠牲者は大館鳳鳴高校山岳部の高校生で、当時私は青森県下の中学3年生だった。

標高1625メートルの岩木山は津軽富士とも呼ばれている。自然のいのちが芽吹くころ、弘前公園の桜や、津軽平野の裾野に広がる林檎の木々の白い可憐な花が、秀麗な山容をいっそう際立たせる。私も何度か夏の岩木山に登っているが、頂上の風に吹かれ眼下を眺めているうちに「4名の高校生はどんな思いで、この山中をさ迷っていたのだろう」と脳裏をかすめるのだ。

平成11年、その脳裏を解きほぐしてくれる一冊の本が世に出た。田澤拓也著「空と山のあいだ」（TBSブリタニカ）である。助け合い、励ましあいながら、あと3キロ下山すれば民家にたどり着く場所で絶命した4名の高校生、まるで彼らと冬の岩木山の山中にいるような感覚になる。著者は「団塊の世代の人たちが、そして僕たちがあの遭難事故があった時代に置いてきたのは青春だけじゃなくて、個性や友情だったんじゃないかと思うんです」と語っている。

「個性」「友情」、あまり耳にしなくなった言葉だ。今の若者がこの本を読んだら、どんな感想を抱くのだろうか…。岩木のおろしに吹かれ、久々に岩木山に登ってみたいと思うのだが、「足腰は大丈夫だろうか？」と不安よぎる団塊世代の私が今ここにいる。

（其田敏美）

「私と郷土と文学」の原稿募集
約600字で会員のみなさまの原稿を募集します。文学館友の会事務局まで、お送りください。

文友の部屋

✻「第3逃亡者」の感想。1937年制作のイギリス映画に感銘を受けました。スリラーもので、展開にやや飛躍があると思いますが、最後の部分で第3の逃亡者が現れる。真犯人が苦難の顔面でドラムを叩く。エリカと浮浪者の老人が暴く。冒頭に、犯人のせせら笑いを登場させ、その後姿なし。濡れ衣を受けたロバートの荒い捜索に趣を置いた展開が推理を膨らませます。（豊島光喜）

「文友の部屋」の原稿募集

150字以内で、会員の声をお寄せください。おススメの文芸作品、映画・演劇などを見た感想などジャンルは問いません。イニシャルでの投稿も可です。

平成28年度友の会総会は、4月24日(日)13時30分からです。

◆会員情報コーナー◆

▽友の会会員で俳人の柏原眠雨さんが、句集『夕雲雀』で、第55回俳人協会賞を受賞しました。おめでとうございます。

編集後記

仙台文学館友の会会報「文学の杜」第50号をお届けします。

▽文学館が開館した平成11年に友の会が発足、会報も創刊された。初代先達の立ち上がりの素早さ、活動の充実はすごい。以来17年。二代目編集者は体力、気力を考え引退の潮時だと思う。（友）

▽編集作業に携わって5年目になる。その間新しいコーナーを設けたりして会員参加型の会報を目指してやってきた。道半ばであるが今回で担当を辞することになります。有難うございました。（宇）

▽季節に対する植物の感応はすごい。僅かな気温の上昇に、草花は硬い土の中から芽を出し、蕾を付け、花を開く。その迷いのない潔さを見習いたいと思いつつ、まだ風が冷たいなどと家の中。（佐）

▽以前、本でつながると書いたが、このところフットワーク軽くすることで「つながるものみ～つけた」の体験が多い。本を読むことも、出歩くことも元気なうちに楽しんじゃおう。そんな楽しみが長く続いたらいいなぁ。（一）

▽先日友人と映画の話をしていて、主演俳優の名前が出て来ず四苦八苦。帰り道で二人同時に思いだし大笑いした。ちなみにその名は、リチャード・ギア。（近）

▽ものは付け、という遊びがある。「好きなものは」というお題に、今の季節なら「花の香りを運ぶ風」なんてキザすぎるかな。「嫌いなものは」さて、どう付けましょうか。（和）

第23回読書会

レイモンド・カーヴァー「大聖堂」

感覚の同化か、共感か

妻の知り合いの黒人で盲目の男性ロバートが、私の家に泊まりに来た。盲人に対して好意的ではない先入観を持っている私はうっとうしい気分である。

食後、テレビに映っている大聖堂を言葉ではなく、紙に一緒に絵を描いて説明して欲しいとロバートが言い出し、男ふたりの共同作業が始まる。ペンを持った私の手の上にロバートの手が重なる。屋根に尖塔を付け、アーチ型の窓を描き込む。私は次第に描くことに熱中する。やがてロバートに促され、目をつぶって続きを描いたのだが、終わっても目を開けることができず、ただ「こいつはすごいや」とつぶやいているのだった。

訳者の村上春樹が一級品と折り紙を付ける短編だが、初めは「共感がもてない」という感想が多く出され、納得できない、よくわからない、宗教的、などの意見が出た。しかし、盲人とふたりで大聖堂を描くことによって主人公の心の中に、ある変化が起きていることに気付く。触ることでわかること、指先に目があるような感覚など、盲人の世界に共感できたのではないかとの意見もあった。

「こいつはすごいや」には疑問が集中した。目の見える自分よりも盲人の方がすごいと思ったのか？　感覚の同化による感激か？　なにがすごいのかわからない、など様々。

12月9日、出席者は11名。（佐）

第24回読書会

チェーホフ「犬を連れた奥さん」

作品の評価に賛否両論

2月10日はチェーホフの短篇小説「犬を連れた奥さん」を取り上げた。「桜の園」「かもめ」など戯曲で有名なロシアの作家だが、短篇小説の名手でもあった。

一口に言えば、モスクワからヤルタに避暑に来ていた男と女の恋物語。男は妻子がいるのに、度々浮気をしている。女にも夫がいるが、下僕タイプだというので飽き足りなく思っている。退屈しのぎに犬を連れて歩き回っている時、男に声を掛けられ、不倫へと発展する。どちらも軽い浮気のつもりだったが、離れられない恋仲へと発展する。波乱含みで前途多難だと示唆して小説は終わる。

「ロマンチックな不倫どころか恋の暴走であり不満」「安っぽいメロドラマのようで失敗作」という酷評がまず目立った。「こうして人は老けていくという時の流れを書きたかったのでは」「前半は不倫を淡々と描き、後半はきれいな恋物語だ」「チェーホフの人間観察の鋭さに感心した」「ロシア革命前夜の一八九九年に発表された作品で、上流階級の怠惰な生活や時代の空気を考えながら読んだ」…。

それぞれの読み方により多様な感想が寄せられ、充実の時を過ごした。出席者10名。（友）

次回読書会は4月13日㈬14時

青来有一「虫」（『爆心』文春文庫　所収）

※参加者は会員に限らせていただきます。申込みは友の会事務局まで。

友の会随想

「犬を連れた奥さん」を讀みて

アントン・チェーホフ 作　神西清 譯

友の会会員　佐藤 敏次

既婚者どほしの男と女。四〇歳近い、三人の子持ち、女房にはウンザリしてゐる中年の男。相手は二二歳位の女、こちらも亭主にアイソをつかしてゐる、生き生きとしたホントウの生活がしたい、などと思ひながら。保養地（かな？）ヤルタでの出會ひ。初めアヴァンチュールかと、互ひに思ってゐた、かも知れない、それがホンモノの戀になっていきさうだ…。過褒を承知で言へば、作者チェホフの純情さにいちばん撃たれた。純情といってはいけないのか、男と女の愛、そのひたむきさ、そこにのみ、人間の生きる意味の至情さを見てゐるのだ、と感じられた。

「お願いですから信じて、私を信じて。…私は潔白な清らかな生活がしたいのですわ。（中略）自分でもどうしていいのか解りませんの。（中略）私も魔がさしたに違ひありませんわ」と女は言ふ。男の感懐のひとつはかうだ。「人間の価値とか云ふ問題を忘れ果てたとき、そして自分達が考へたり爲たりすることを除いたとき、この世界のものは何と美しいのだらうと思った」男の生活、精神は二つに引き裂かれてゐるのだが、ホンモノの愛、その情熱に身をまかせるほかに手は無い、と作者は言ってゐるかのやうだ。古い映画、「逢びき」「終着駅」「旅情」等での男女の捉へ方、と同質の味はひ、をフッと感じた。一〇年以上も前に再見したきり、今もう一度視ないと何とも言へないのだが。さて、この小説を敷衍すれば、待ってゐるのは悲劇だらう。ボヴァリー夫人が自死したやうに気が狂ふのか…。シビアな物言ひをすれば、このヤクタイも無い女たちに至純の情熱めいた愛はふさわしいのか？　中年男の妻子との、若妻の亭主との家庭生活を、俯瞰の視點から描けば、個々の人物の多様な面がでて、この小説のタッチとはちがった、面白味もでたかもしれない。神西清氏のすぐれた譯文の勞を多としつつも、ザラついた胸はなぜか鎮まらない。永井龍男「あひびき」から、色川武大「遠景」「復活」、小島信夫「落花の舞」等のコトバの海に身をまかせやうと思った。

会報が50号になりました

＝編集担当者の思い特集＝

文学への情熱を燃やそう

私が会報編集にタッチするようになったのは24号（平成19年7月）から。開館（平成11年）以来の初代館長井上ひさし氏がその年に退任、二代目の小池館長に代わった。友の会役員も初代から二代目に代わり始めていた。初代の諸先輩が並々ならぬ情熱をもって基礎を築いたことを知って感動した。以来、内容の充実をはじめ読みやすいレイアウトの工夫などに努めたつもりだ。

しかし最近はマンネリズムに陥っていると反省している。総会、文学散歩など恒例の行事を扱えば、毎年似たような紙面になるのはやむを得ない。それでも、恒例ものは小さく圧縮し、随想欄もコンパクトにして、もっと会員の文学活動や意見を載せたい。文学について情熱を燃やして取り組み、会員の交流に役立つ会報目指して前進したい。（阿部友康）

友の会の会報は花壇

会報の編集はいわば枠組みを作って、花の苗を植える、花壇作りに似ている。花の苗は会員の投稿であり、編集担当者の文章ということになる。美しい花壇にするには、背の高い苗、低い苗、いろいろな色合いの苗などバラエティーに富むことが望ましいのだが、何よりも必要なのは活き活きとした苗なのだ。これを実現するのは、会員の投稿が多くなることに尽きる。「読書会感想」「私と郷土と文学」「文友の部屋」などの枠組みへの積極的な投稿をお願いしたい。合わせて枠組み単位で会員が集う企画など行えれば、花の苗の肥しにもなるだろう。豊かな花壇は一朝一夕にはできない。多くの会員の手で長い間育んでできるのである。そして「文学を語る場」の中心になれば素晴らしいことだ、と思う。（宇津志勇三）

スクランブル交差点のように

会報作りに参加するようになったのは平成22年の36号からなので、今回で15回かかわったことになります。

会報は会員のために発行されるものなので、共有されるべき情報の発信と、会員からの情報受信の両方が、誌面に表れる編集が理想なのだと思っています。

しかし、これがなかなか難しい。書いて頂くことをお願いしても「書くのはどうも…」というお返事だったり、またうまく見つかっても、いつも同じ人というわけにもいかない。

今、会報は4㌻の作りですが、そのうち1㌻は会員からの文章でいっぱいになったらいいなあと夢見ているのです。四方から人が行き交うスクランブル交差点のようににぎやかに。（佐野のぶ）

ものの見方が広がった

早くから入会していたが、興味ある企画展だけのぞいていた程度だった。それが回数を重ねるごとに文学館に足を向けるのが楽しくなった。他の文学館にも立ち寄ったりすることが多くなった。その時代に生きた作家の生原稿をみるのが好きになっていった。文字の形から作家自身の性格が見えてきたりする。私のあてずっぽうだとは思うが一人にんまり。ただこんな時代だから、自筆の原稿は消えて行くのではないかと危惧している。

編集に関わるようになってからは他館の友の会活動のことをうかがって、会報を貰ったりするようになった。最後に何時もハズレなしの文学散歩について。まずは参加してみてほしい。きっともっと文学館が好きになる。（一文字ひろみ）

ある日の編集会議（平成28年2月18日）

15周年記念号で貴重な体験

編集には15周年記念特別号から携わっている。特別企画の佐伯一麦氏、渡辺祥子氏、佐々木隆二氏の座談会に、編集班として立ち会わせていただいた。文学館との関わりや東日本大震災について、3人の体験や思いをライブで聞けたことは、とても貴重な体験だった。

編集会議がある日は大抵車で向かうが国道に入るといつも緊張する。文学館構内に曲がるタイミングが遅れ、そのまま走り過ぎるというドジを繰り返しているからだ。数分の遅刻か時間ぎりぎりで会議室に入り、ドア近くの席につく。その席の向い側の壁にモダンな印象の横長の窓があり、長方形の空が見える。左端には樹木のてっぺんがわずかに覗いている。葉の色はときにより緑だったり紅葉だったり、心癒される。（近田裕子）

会報という器

文学館は長いこと「遠きにありて思ふもの」だった。参加したい催しに行けなくても「悲しくうたふもの」ではなく、そこにあるというだけでありがたい存在だった。友の会に入会したのも最近だ。そんな私が一昨年の夏から会報の編集に関わるようになった。15周年記念特別号の編集は忘れがたく、そこで提起された課題は「文学館を身近なものにするために友の会は何ができるか」だと受け止めた。私たちに何ができるのだろう。まず始めに想像力を働かせるというのはどうだろうか。子育て世代に、働き盛りの人たちに、学生に身を置いて、私だったらと想像してみよう。そして何か思いついたとき、それを受け止める器の一つに会報がなれればいいなと思う。（長沼和子）

成長し続けた50号へのあゆみ

平成11年3月28日に仙台文学館が開館し、その年の10月に、友の会が発足しました。11月、当時友の会役員だった小岩尚好さんと事務局で編集を行い、創刊号を発行しました。文学館行事の紹介、友の会役員や会員の友の会への期待など、多くの人の声を掲載できるような紙面構成を行いました。平成19年度から、役員の阿部さんに編集がバトンタッチされ、平成21年3月には10周年記念特集として10年間のあゆみなどを盛り込みました。平成22年度からは役員の宇津志さん、佐野さんにも編集メンバーになっていただきました。平成26年11月発行の15周年記念特集号からは、一文字さん、近田さん、長沼さんにも加わっていただき、事務局を含めて7人になりました。会報が、どんどん彩り豊かで、奥行きのあるものに成長しているのを感じます。

このたび50号を迎え、これまで編集に携わった方、原稿をお寄せくださった方、いつもお読み頂いている会員の皆さまに、心より感謝申し上げます。これからも、文学館の応援団として、多くの会員の皆さまの声が詰まった会報が発行されますように、よろしくお願いいたします。（事務局　伊藤美菜子）